

「荒山水天狗鼻祖」

——曲亭馬琴の青年期——

清田 啓子

「あらやまみづてんぐのはじまり」と振り仮名がある黄表紙です。この作品は、寛政五年、馬琴二十七歳（数年）の正月、初めて七種もの黄表紙を世に送り出したその中の一作です。それより以前、寛政二年秋に、当時人気作家であった山東京伝を訪問して戯作の指導を請い、第一作は翌年春、京伝門人大栄山人作として「廿日余用而二分狂言」（はつかあまりにしじふりやう）つかひはたしてに四十両尽ぶきやうげん」（歌川豊国画）を出しました。そしてそれに続く年二三の作をものしてはいましたが、この頃の黄表紙作家らしく、年に何冊もまとめて出版するようになるのは寛政五年からです。以来、年に十種内外を書き続け、読本制作に専念するようになる文化初年までに八十部を越えるほど作っています。しかし彼の黄表紙に対する批評は冷たく、理屈っぽくておもしろくないというのが一般的なところです。古くは式亭三馬から「あんまり白癡

（こけ）おどしに、ちんぷんかんはやめなせえ」と皮肉られ（親讐膏藥）、近くは森銚三氏「黄表紙解題」正続二冊を見ましても、馬琴のものは「二分狂言」一作しか採用されず、しかも、これについて、
をかしみに乏しい黄表紙で、一向に取るべきものがない。馬琴の処女作としては、意義があらうけれども、馬琴の黄表紙作者として立つべき人でなかったことはこの一作よりして明らかにせられる。
と酷評されています。もっとも「黄表紙解題」序文によりますと、一般に黄表紙と呼ばれているものは、雑多な性格のものなので、厳しく限定して、純正黄表紙といふべきものを重点的にとり上げたとのことですので、そして純正黄表紙とは春町系黄表紙と称してもよく、恋川春町の「金々先生栄花夢」に備わる条件を満たしている作品とするとのことですので、馬琴の作が冷遇されるのは

当然のことでした。

諸家の言によつて黄表紙の本領とされるところをまとめてみますと、都会的センス、明るいユーモア、軽妙洒脱、諷刺とうがち等でしょうか。春町を筆頭に、朋誠堂喜三二・芝全交たちの華々しい活躍、あとを襲つて気を吐く山東京伝の作品を目前にしながら、馬琴は何と重くらしい作品を書き続けたことでしょうか。中には「花団子食家物語（はなよりだんごくひけものがたり）」（寛政五年）や「无筆節用似字尽（むひつせつようになじづくし）」（寛政九年）のように、或る程度評価されているものもありますが（注1）、大部分は、野暮らしくまわりくどく、漢学知識をふりまわして、国領不二男氏によれば、すでに教訓意識をも旺盛に働かせていたというものです（注2）。黄表紙らしい黄表紙——春町京伝ラインからは大きく外れた作者と言わざるを得ません。こういう性質のものであるのに、なぜこのようにたくさん書かれたのでしょうか。それは読者の需要を察知した書肆の方針でありますので、なぜこのように求められたのかということでもあります。これについては、もう少し慎重に調べてみたいと思っております。寛政の改革以後、文筆関係者のあさましき屈服という根本的理由の他に、今、憶測していますのは、江戸の人口構成を考え

て、江戸に住む文芸愛好者がいわゆる都会人ばかりではないこと、参勤交代のお供の武士や商用などで出府する地方人が、都会的洗練に圧倒されず、劣等感を抱かずに読め、故郷へのお土産とするにも恰好な、老実（まじめ）な内容をもつ書物に、馬琴の黄表紙も属していたのではないかということ。このようなことを馬琴が意識していたかどうかは、彼の著作その他周辺の資料によつて明らかにしなければなりません。今はその余裕をもちません。読本の時代に入りますと、周知のように、地方でもたくさん売れ、その評判の上々であることを馬琴は誇らしげに語るようになります。

推測はさておき、黄表紙をもう七十篇ほど書き続けて来た享和四年（文化元年）に至つて、その春発刊の「敵討式人長兵衛（かたきうちちにんちやうびやうゑ）」の奥に、よく引かれる文章ですが次のような言があります。作者曰、喜三二が金々先生ゑいぐわのゆめより、くささうしにこっけいをつくしたること廿余年、中ごろ一へんしてぶじゃれとなり、今又一へんしてまじめとなる。黒じゆすのおびがすたとおもへば又はやり、ながばをりがはやるとおもへば又すたる。草ざうしのりうこうも又そのことし。是から後は、大昔の金時ばけ物にならふもしれぬ。御油断なさるな。

喜三二の金々先生などと、単純な間違いがあるものの、黄表紙の変化流行をよく認識した言と言えましょう。ただこの付言は、「敵討忒人長兵衛」という作品の、従来の黄表紙の枠を大きくはみ出していることへの言い訳と理解されます。文章の量が非常に多く、伝奇的傾向のつよい作品で、本文中の書入れに、犬のことばとして

わんくく、おれもいつものくささうしなれば、しやれるところだが、かきものがまじめゆえ、しやれることもできぬ云々（九丁表）

などと言わせているのとも対応していると考えてよいでしょう。しかしながら草双紙の流行を的確にとらえているのはさすがで、後年「近世物之本江戸作者部類」を著述する片鱗をすでに見せています。そしてこの認識は、十年近くの黄表紙制作期間を過ぎてまとめられたものでありながら、その過程において、世の人心・流行に無意識だったとは言えない重みを、わたくしどもに感じさせます。ことにその間の黄表紙——初めは先輩の作を不器用に模倣し、常套句をまきちらしていますが、やがてあちこちに書きつけられるようになる言い訳めいた書入れまたは居直りのようなことばを思い浮べますと、やはり馬琴は自己の「純正黄表紙」作者らしからぬ資質を痛感しつつ、その時々もろもろの要請に応じ続けていたので

はないかと考えさせられるのです。とにもかくにも、右の言のように黄表紙を総括して、同じ年の四月刊（翌文化二年正月刊ともいわれますが）の読本「月氷奇縁」が好評を得ると、彼は「純正読本作者」の道を歩み始めます。

馬琴の黄表紙は、このように文学的価値もあまり認められず、後年の作者自身にとっても不本意至極な作品群でありました。けれども、これを彼の青年時代を考える資料として眺めますと、意外な価値を蔵しているらしく思われます。彼が書きのこしている自伝的文章は「吾仏之記」を初めとする随筆類、鈴木牧之あての手紙などにあります。多くは文政年間以降のもので、青年期の状況をなまな形で知ろうとする時には物足りないものでもありません。その種の探索のためには「俳諧古文庫」（二十一才の編）・「罔両談」（二十三才の編）なども材料となりますが、いささか形式的に過ぎ、しかも断片的です。その点黄表紙には、書入れと称する副次的な、作者が読者に向ってただけてみせられる場があり、そこには馬琴の場合、前に触れたためらいがちな言い訳なども含めて、存外正直な発言が見出されるのです。これはまた別に整理して御報告することとして、今回「荒山水天狗鼻祖」をとりあげることになりましたのは、主人公

に作者の投影が見られる点で、同時期に発表された作品と異質なものと考えたからです。作中に作者自身が登場することは、春町以来の伝統的趣向と違ってよく、馬琴も「二分狂言」にその手を使っていますが、「天狗鼻祖」の場合はまた別種のものなのです。

まず、あら筋から申し上げます。序文の次に、「序開（じよびらき）」として作者馬琴が書きためた作品を書

林何某が持つて行ったとの説明があつて、

「そも此の作の趣向といつば、正面二間のあいだに波幕を見せ、西の大はしらのきはに松の木あり……

という書き出しで、この作は本筋に入ります。かいつまんで申しますと、美保の松原で白良が天つ乙女の羽衣を拾い、返さずにしまいこんだので天つ乙女は仕方なく白良の妻となります。やがて子が生れますが、それは驚いたことに玉子でした。それでも大事に温めているうちにようやく「へんちきなひよっ子」が殻から出て来ます。

その説明文にいわく、

羽のはへたは母の天女にあやかり、身体の人間なみなるは父の白良に似たり、鼻の高きは誰にあやかりしならん、案ずるに高慢くさき作者に似たものか

つまり人間の身体に羽が生え、鼻がばかに高いという「世に珍しき片わなる子」でした。これは言うまでもな

く天狗の姿です。この子は両親から「太郎よ、ぼうよ」とかわいがられ、後には「一把にからげて太郎坊とよびならは」されて育ちました。太郎坊とはこれまた御存じの通り、天狗の代表的な名前です。この子が最後の場面で不動明王から「なんぢ天性愚（ぐ）なるゆへ、名をもてんぐとよぶべし」との託宣を受け、題名の天狗鼻祖の意が完備するのです。

それはさておき、このかたわの少年は子供仲間からのけものにされ、羽のある同志、隣の鶏と遊ぶほかない有様でした。それを見て母の天つ乙女は歎き悲しみ、挙句に、自分が親子の縁を切つて天上へ帰ればこの子の羽もとれるであろうと考え、羽衣をようやく盗み出して、葛の葉もどきに名残を惜しみつつ昇天します。残された太郎坊は、母の跡を慕つて迷い出で、鳥たちからさんざん苛められていた所を、つるめその次郎作という者に助けられ、親切に育てられます。その家で、

今は六月ごろのきうりほどにきびの出来る年になれども人交わりもならず、ときをつくらねば鶏には劣り、たまく使ひに出せば道で油揚を浚ひてしりがくるという状態で、次郎作がもてあませば、太郎坊も居にくくなり「いっそひねって俳諧師にでもならんと」旅に出ます。

道中、相模国の山中で追はぎにあい、ひどい目にあわされます。——木の枝にくくりつけられて焚火でいぶされ、逃げ出したのを川へはたき落され——それは天狗の修行になぞらえて、水火の苦しみと説明されるのでした。身一つになった太郎坊は、またしても折よく通りかかった田舎芝居の興行師らしき千本の与太郎・介四郎なる二人に救われ、彼等の見世物となることを承知します。蔑簾掛けの小屋で、鳥の真似の軽業をさせられますが、案外評判にならず、却ってこしらえものであらうと疑われて、与太郎たちはこの軽業を引込め、鼻の高きより思いつき、市川団十郎と看板を上げ、たところ、その名にひかれて連日大入満員の盛況となりました。太郎坊の偽団十郎は、芝居好きの若隠居後室のごひいきにあずかり、
「昼夜うまいものの食ひ飽き、金銀の掴み取り」という結構な暮しをしながら、一月余りも過します。そこへ、本物の団十郎が都見物の帰途、旅の疲れを休めようとこの山里へ来かかり、たちどころに偽団十郎を舞台でしめつけてしまいます。太郎坊が今は手詰めの場と観念して、団十郎にとびかかった瞬間に、下座はうすどろくになり、今までありし団十郎、引抜き衣裳にて不動明王のかたちを現じ、利剣をたずさへ立ち給へば、そばの人々も制吒迦童子・金伽羅童子に、後室も延命子安の地藏に現

じ給うという奇瑞が起ります。この不思議の中で、太郎坊は不動明王からこんこんと諭され、てんぐと名のつて強情我慢の凡夫を罰せよと命ぜられて、心を改めると誓います。これで黄表紙の定石通り、めでたしくで大団円、江戸っ子の人気者団十郎とそのお家芸「不動」の舞台を援用して、サーヴィス満点の結末です。

この作品に、作者自身が隠されているのではないかと考えた手がかりは、第一に、鼻の高いのが高慢くさき作者に似たものかある文章でした。次に、結末の不動明王から心を改めよと言われること、それが序開きの部分の

(ママ)

御らんの通りただ今では唐机の四角四面、てした硯の石部金吉となりました。

という作者自身についての書入れと対応すること、それから次郎作の許に居にくくなって、俳諧師にでもと行脚に出るといのが、常識的な設定ながら、馬琴自身の趣味からの思いつきと考えられることなどです。

馬琴の傲岸不遜は世人の評判するところでしたし、自身でも、例えば鈴木牧之あての書翰（文政元年十二月十八日附）に、蓼太・吾山などを批判した後、

かく認（したため）候うち、両の脇に翹（つばさ）生（はえ）鼻おごめきて延るやうに覚えて、われながら

そらおそろしく候、御一笑、

とたわむれながら天狗にたとえているところもあります
が、寛政初年の若い頃、高慢くさき作者と自認していた
とは、生い先見えてめでたきことというべきでしょうか。
それはまた、戯作者仲間足ふみ入れた当初の、作者
本屋の誰彼の批評であつたかもしれませぬ。

この「へんちきなひよつ子」はまだ天狗そのものでは
なく、鼻の高さだけにその素質をひそめた、人間でも鳥
でもないかたわ者——つまり志だけは高く保ちながら、
実際はこの世のどこにも属する所のない、妙な存在と理
解されます。実人生における馬琴も、この頃まで安定し
固定した境遇にはありませんでした。彼の年譜を簡単に
辿って行きますと、（以下の引用文は「吾仏之記」）小
禄の旗本松平鍋五郎信成家に仕える滝沢家の五男として
生れ、九才の時に父が歿したため長兄羅文（便宜上兄弟
を俳名で呼びます）が家督を継ぎますが、十七才の弱年
ゆえ俸禄半減、一家は窮迫して、馬琴は一年前から手習
に通っていたのも中止せざるを得ず、翌年仲兄は他家の
養子となるという状況でした。羅文は父の在世中から主
君の近習として出仕していましたが、父の歿後間もなく
故ありて深川木場の第（やしき||松平家）を去りて浮
浪”となつたので、馬琴が十才で家督を継ぎ、主君の嫡

孫八十五郎の小姓となりました。俸禄はいよいよ減少し、
母と妹二人の四人口をしのぎかねる有様、その不足と、
親類の許に寓居する羅文の衣食の料は、母の貯えでまか
なわれたということですが。このようなどん底生活でも、
女子供だけの頼りない家族でも、肩をよせ合つて耐える
慰めがあればともかく、間もなく馬琴は十三才で独居の
身となり、殺伐とした生活に追いこまれます。羅文が新
たに戸田大学忠誠に仕え、母が後見のため妹二人と共に
そちらに移り住んだからです。それからの事情を「吾仏
之記」には次のように書いてあります。

是よりして倉蔵（馬琴）独居一年、多務にして薪炊に
由なし。故に宿所を返しまゐらせて、君所の次の間に
起臥す。是すら不便なるに、使君八十五郎君大癩症に
て、性急烈火の如し。倘（なお）聊（いささか）も旨
に違ふ時は、常に可責鞭撻せらる。其艱難いふべから
ず。

十二三才の男の子がヒステリー気味の若君に駆使され、
虐待される苦勞は察するに余りあります。日中だけの奉
仕ではなく、住む所を失つた少年に日夜分たず課せられ
たこのような生活は、当然長く堪えられるものではありません
でした。読書好きで、手習は充分続けられなかつた
ものの、兄たちの影響もあつて俳諧に興味をもつてい

た彼は、勤仕の暇に松平家門前に住む御家人の俳人柴田雙松の許へ出かけ、話説を聴き、志をなぐさめていました。が、「使君の可責ますく酷（はなはだ）し」くとうく安永九年十四才の冬十月、

木からしに思ひたちけり神の旅

の発句を部屋の障子に書きつけて、「飄然として深川の第を去て竟（つい）にかへらず」すなわち無断で出奔しました。後年の彼の読本に、名将の若君が好んで聡明玲俐に描かれ、年令の割に老成した姿を見せる時、わたくしはつい馬琴年少時のこの苦労を想い浮べてしまいます。おそらく作者も、その体験を思い起しながら、理想像彫琢にいわば大人気ない努力を注いだのではないのでしょうか。

主家を出奔したものの、父・兄と受け継いで来た家督だけに、母や長兄の怒りを恐れて父の知人宅に宿泊していましたが、やがて羅文が迎えに来、「汝甚（はなはだ）大胆也、いさ来よとて戸田の宿所に」ともなわれ、再び母たちとの家庭生活に戻ります。そして三四ヶ月経ち、天明元年三月になると、叔父田原忠興の養子になる含みもあってその家に起居し、元服して、官医山本宗洪、田安家の儒者黒沢右仲両者に就いて勉学を始めます。けれども養子の話はたち消えになり、二年の後また羅文の許

に帰って、今度は兄と共に戸田家に仕えることになりました。初めは「卑識なる故に従はず。母兄強て教訓す。已（やむ）ことを得ず」承諾したのでした。戸田家では若殿が能楽をたしなみ、馬琴にも一雙流の笛を学ばせ、宴席の設けられる度に囃子の員数に加えられるので「本性音曲をこのま」ぬ彼は「是を病」んで辞職の思いをつのらせ、すさんだ生活にのめりこんで行きます。「吾仏之記」では、

是より放逸にして行状を修めず、故に母兄歎ばず。四年甲辰の春三月、興邦（馬琴）母兄に辞して戸田家を浮浪す。是よりの後、俳友或は読書同好の家に寓居すと記述され、以来母の大病を告げ知らされるまで、友人の家を転々としていたようです。天明五年、母が亡くなると、水谷家に仕えていた仲兄鶏忠が馬琴を同居させ、同じ家に出仕させますが数ヶ月しか続かず、小笠原上総介家に仕え、次に有馬備後守家に、と目まぐるしい転職の後、天明八年二十二才の夏、病を得て久しく治らず、有馬家を辞して結局翌春まで長兄の許に臥してしまいました。その間兄の親切は「無用の旧調度を雋（うり）て薬料に充つ。慈恩二親に異ならずといはまし」と馬琴を感激させるほどのものでした。本復の後には「斗米に腰を折らまく欲せず」新たに自立の道を手探りし始めます。そ

して官医山本宗英の塾に入って宗仙と号し、主人の長子と共に医学に励み、儒者亀田鵬齋の教授をも受けますが医学よりも儒学を好んで主人の気に入られず、二十四才の頃山本の塾を去り、独り住居の中で遁世まで考えながら、遂に山東京伝を訪ねて、戯作者の道を探り当てたのでした。母亡き後、仲兄鶏忠は二十二才の若さで病歿、妹二人は嫁ぎ、羅文は山口家に仕えてすでに数年を経、徐々に重用されつつあるという中で、さすがに馬琴も何とか身の納まりをつけたかったことでしょう。

簡単にといいながら不手際から、これほど紙数を費してしまいました。原因の一つは馬琴の放浪生活の事柄の多さにもあります。数々の奉公先から、席の温まる間もなく飛び出して来てしまうのは、彼の人になじめない環境に順応できない性格のためと、まとめてしまうことができます。少し立ち入って考えれば、おそらく、自分に接してくる物ごとの全てに、自己に対して敵意なり悪感情をもって向って来ているか否かを、鋭敏に識別できる感覚が備わり、その場所に位置を占めるのが自分に可能かどうかを判断できる能力をもっていただけということでしょう。この感覚なり能力なりに駆り立てられて、少しでもささくれだったものを感じ取るやいなや、その場を逃げ出すということがくり返されたのだと思います。

その度に母を歎かせ、兄に厄介をかけ、それを辛く思い、或いは叱責を恐れながらも定住できなかったのです。気品高く温和な長兄から、珍しく激しい言葉で叱りつけられたり、またもの固い中に和らぎあつて人々に愛せられたという仲兄鶏忠に、同居して同じ家に勤めていた頃、堪忍記を読めと勧められたりしましたが、そして兄たちを尊敬していたことは当時の文章に明らかなのですが、それでも彼は定着することができませんでした。どうすることもできない自分を、周囲とは異質の人間と認識したところから、ふつうとは違う生きもの「へんちきなひよっ子」が誕生したと考えられます。そもそも最初の出奔に「神の旅」と表現した気位の高さは、天狗の素質充分だったと言えます。

「荒山水天狗鼻祖」では、何度か住み所を浮かれ出る太郎坊が描かれます。最初は、生家から母を慕って迷い出たというところ、父の白良が切り捨てられているのはあるいは早く父に死別して母を中心に暮らして来た馬琴の感覚の無意識の表われでしょうか。太郎坊は人間の友達をもてず、鳥の仲間に入って無邪気に遊んでいたのを、母の天女は我子をどうしても人並の社会で暮させたく、子から離れる辛さをしのび、天上へ戻ります。人間と鳥類を、武士の町人のというつもりはありませんが、幼く

て母に離れた心細さを馬琴は経験しています。当時母がなぜ羅文方へ移ったか、詳しい事情はわからないのですが、作中の天女の歎きと決心をみますと、かわいはずの末の男児を一人残して出た心強さに、母の自己犠牲を彼は汲みとっていたように思います。推測をすすめれば、他人の中で、保護者なく暮す生活が、武家社会で地歩を固めてゆくよすがになると、母が判断した結果のことだったのかもしれませんが。その母に対する馬琴の愛惜の辞年来苦勞多きの故に、年尚半百に至らずして、頭髮霜を見る者多かり。

其慈恩用心、男子も及ばざる所あり。

其孝慈貞操、かくの如きの者（このような言動）、少なからず。「以上（吾仏之記）」

等々を見ますと、太郎坊が母を慕ってという簡単な月並な文章も、切実な思いがこめられているように感じられて来るのです。

その次の太郎坊の出走は、親切に養育してくれた次郎作の許からです。ようやく一人前といえる年頃に育っても、人間社会からはやはりはじき出されていて、と言って小さくなって過すわけではなく、鳶のように道で油揚げをさらういたずらを重ね、もてあまし者になったためでした。自分の性質を抑えきれず、親切な人々に迷惑の及

ぶのを恐れて自ら去るというパターンは、長兄と共に仕えた戸田家からの辞去に重なるようです。そして最後の場で、不動明王から、天性愚なることを指摘されますが、作品中には具体的に太郎坊の愚なることの説明がなく、強いて求めれば人間なみでない姿によってひき起されるトラブル、すなわち社会的順応性の欠落がそれと解せられるのです。とすると、それは馬琴が順応できない自身を自覚していたことを示すことになりました。（天狗は魔道のものという認識は一応度外視しておきます）その性質が結末で矯正されることなく、止揚された形で凡夫を罰する資格を与えられるのは、後の読本流の筋立から見ますと理屈に合わず、問題ですが、当時の馬琴はのんきだったのか、またやはり無意識に非順応性（？）を正当化していたのでしょうか。

このように太郎坊の放浪と更生とを、馬琴の実人生に重ね合わせました時に、材料を身边から得て作られた作品、少くとも構想のきっかけを実生活からつかんで来た作品と考えられそうに思います。その上で、この作品の感触をもう一度ふり返ってみますと、鳥仲間を身落して遊んだ無邪気さ、威勢のよい小鳥たちから悪態をつかれ、苛められた悲しみ、羽を見世物にして勤める舞台で、本ものを却ってつくりものであると疑われるばかばかし

さ、世人の眼のなさを逆にとり、偽団十郎と居直る大胆、等々が、馬琴の当時の感情を生々しく反映したものに違いないと思われます。

後年『解(馬琴)不肖と雖も年廿五の時より志を改めて行状を慎みつ』(著作堂雜記)と記しついたり、友人への手紙に、二十五才の頃から無理に固くなり云々と書いていますので、二十五才の転換は忘れ難い出来事だったに違いありません。けれども固くなる以前の馬琴がどのような生活を送っていたか、具体的にはわからないのですが(注3)、この作中の後室に最負にされて、うまい物の食飽きというような享樂的な場が提供されたこともあったのでしよう。体格の立派なのを見込まれて、角力取にと勧誘されたこともありましたが、受けつけなかったものの、そのような話を切出せる気安さを彼がもっていたことは確実です。晩年の天を恐れ身を慎む姿からは想像もできない、潑刺とした、やわらかい心を持って、誇り高く奔放に、そして必死に、馬琴は青年時代を生きたのだと考えられます。

二十五才を転機としたことについては、ちょうどその年が京伝処罰事件の年にあたるため、原因を改革への遠慮に、または戯作の場を与えられた環境の変化に漠然と求められがちですが、それでは不十分なような気がします。

たしかに、京伝の構想を受けて代作するなど存在価値を認められた生活に入るわけですが、わたくしは「荒山水天狗鼻祖」にもう少し積極的な理由を求めたく思います。この作と同時に発表された黄表紙は、二十五六才の間に書かれたはずですが、京伝指導のもの、浄瑠璃の焼直しものを除けば、「鼠子婚礼塵劫記(ねづみこんれいぢんこぶき)」「御茶漬十二因縁(おんちやづけじうにいんねん)」のように見立て・物づくしで成立している作と「天狗鼻祖」とになります。前者は、馬琴が最も好み、年期も入っている俳諧の分野、殊に俳文の仕立て方を応用すれば苦勞なく出来る種のもので、それは「鼠子婚礼」の末尾で、子年に因んでこれを書いたが、鼠でなく牛となると、許由が耳をあらふか、曹植がなんだいの詩、菅丞相のつくしの配所、これより外てのない代物になった。

と、手のうちをさらけ出しているのを見てもわかります。いわば觀念的な知識だけでも作り上げられるわけで、彼の黄表紙の大部分がこのような発想から成立しています。一方「天狗鼻祖」は見て来ましたように異質のもので、この作を書いたために、即ち作中に自己を投影する手法を得たために、現実の身を戯作者の境涯に定住させる決心がついたのだと考えたいのです。

馬琴のあこがれ出やすい魂は、作品を世界として、限

定された中で活躍することになります。そして作者の地位は、石部金吉となっても保全されねばなりません。志を改めたとは、現実の身を俗間にとどめる手段でもあり、希望を表明した言でもありました。実生活では、それから間もなく家庭をもち、寛政十二年の「譬喩義理子禰禪（たとへのふしぎりとふんどし）」最終丁に三人の子供が遊ぶ姿に、自分の子の名——崎・祐・鎮として——をしるしつけて、おちついた良い父親のおもかげを現わします。そして作品の面で見ますと、読本に専念し始めると黄表紙合巻を軽く扱い、読本の主人公に史上不遇だった人物を好んでとりあげるようになります。その主人公たちへの共感、たとえば「椿説弓張月」完成時にしるした為朝へのことばなどを見ますと（注4）、不遇への同情・この世に所を得られなかったことへの共感が切々と感じられるのですが、それは「天狗鼻祖」に示した少年期の挫折のいたみ、自己の不遇に深く根ざしたものと考えられます。不遇の人物への同情は読本中の主流、史伝物制作のモチーフになって行くわけですが、その萌芽がこのような片々たる黄表紙に存していたのを、非常に興味深く思うのです。

付記 「荒山水天狗鼻祖」は「花団子食家物語」・「鼠

子婚礼塵劫記」・「御茶漬十二因縁」と共に「駒沢

短期大学研究紀要」第三号に翻刻してあります。

注1 「花団子食家物語」は、日本文学大辞典・同作の項（小池藤五郎氏執筆）、「无筆節用似字尽」は、尾崎久弥氏「馬琴初期の黄表紙について」（「江戸軟派雑考」所収）に述べられています。

注2 「黄表紙よりみた馬琴の教訓性」（「近世文芸」第十二号）

注3 山東京山「蜘蛛の糸巻」によれば、馬琴が京伝宅の食客でいた頃、蔦屋重三郎へ紹介するのに「酒はのまず、手も書き、文字もよめ、作気もあり、てうどよからん。しかし実体（じつてい）とたしかには請合申されぬ」と言ったとあります。

注4 水野稔氏「馬琴文学の形成」（「文学」第三十六卷三号）に、「椿説弓張月」において「いわゆる史伝物という馬琴の本格的読本の態度方法が確立される。この作が完成したとき、主人公為朝に対して「君とわれいかなることや契りけん、昔の世さへ思ひやれば、亦不思議の因果なるかな」などと情熱をこめて書きつけないではおられなかったほど、作中人物と一体になり得た喜びと感激とを覚えた作者なのである。」との指摘があります。